

三浦半島民俗控帳 (二)

鴨居の「さいと」

高橋 恭 一

正月三カ日も過ぎ四日ともなれば、坊さんの年始とて、どこの家でも門松をはじめ松飾を取り除いてしまふ。この日から「さいと子供」とて中学校一、二年生の男子を頭に小学生男子の子供らが、三人五人と組をつくり思い思いに手分けして、各戸に取り除いた飾を集めにまわる。そしてこれを海岸の一定の場所に集積して置く。これがその年の「さいと」焼きの第一歩で、毎日のように子供は学校から帰ると集めあくる。

長さ十メートル余もある盃そう竹の先端に、赤・白・青・黄・紫などの色紙で大きな御幣を作り、十三日の夜から「さいと子供」全員でこれを担いで各戸を廻り、これを各戸に入れ「ゆわわっせ、ゆわわっせ、せ(さ)いと」の神をゆわわっせ」と、声をそろえてさわぎたて、この御幣をゆすってはさわぎ立てる。これを「おんべ」と呼んでいる。各戸では祝う気持で若干の金員を子供たちの頭株に与える。金をやらなければいつまでもさわぎつづけている。

十四日の夕やみ迫るころ、(最近は大人の手すきの時)子供たちは全員揃って「せいと組んでけえらっしえ、○○○○(部落名)組んだぞ、おらはおそいね」と声を合せてどなりあくる。

そこで、大人たち(主として若者たち)が浜に出て、直径十五センチぐらいの生松を枝葉のあるまま中心として立て、これを心棒として廻りに集められた竹、松をはじめ正月飾の一切をまとめ大きな円錐形の塔を作りあげ、例の「おんべ」を中央に立てる。この塔の高さは十メートル以上もある。

さて、これが出来上ると、数年前までは子供たちが裸となり寒中海に飛び込み、各児海底の砂を手に、先ず出来た「さいと」にぶっつけて「せいとがよくもえるように」と真剣そのものに祈り、更に砂を手に裸のままかけ足で部落の社に同様な祈りを捧げ、持った砂を社前に置いて帰り洗湯に飛び込み入浴する。(現在は行われていない。)

入浴後、子供たちは一応帰宅して仮睡する。夜中に起きて「さいと」に集り点火の準備にかかる。(しかし準備することとてなく、只さわぐば

かり。)

十五日朝五時頃ともなれば、またまた子供らは隊を組み「せいともつけてけいらっしえ、〇〇〇〇(他部落名)もつけたぞ、おらほはおそいぞ」と、声高らかに朝の静けさを破りながら部落内をあるきまわる。

そこで青年たちは、浜に出かけて「さいと」に点火する。またまた子供達は、燃え終らないうちに、「ちんちとばんばともち焼きこうらっしえ」と、どなりあるく。

すっかり燃え終ると若者は火のあと始末、子供たちは、宿と呼ぶ家(年々適当の家に依頼する)に集り、各児持参の茶碗箸などで朝食を共にして解散する。これで四日以来の「さいと」行事も終了するわけである。

長沢の「せーとっこ」

赤 橋 尙 太 郎

横須賀市長沢(ながそ)の左義長について同所の高橋宇之助氏(明治四十二年生)からきいたから記しておく。これは大正八、九年頃のことではやっていない。この行事を「せーとっこ」といい、松飾などを燃すことは「せーともし」という。

「せーとっこ」は子供の行事で部落毎に一グループがあり、その組織は六年生が「こがしら」、五年生が「ちうがしら」、四年生と三年生を「いも」と呼ぶ。尋常三年生になると「いも」の仲間入をする。その仲間入のために十銭だす。十二月二十五日頃になると「やど」を作る。「やど」は毎年きまって「せーとかみ」付近の家の物置を借りるのである。寝とまり出来るようにわらを敷きむしろをのべる。各自夜具を持ってくる。この日から全員がやどにとまることになるのである。食事は各人が家へ帰ってすませてくる。その日から中がしらがいもをつれて行き笹刈をしたり、くずかきをしたりして、それを「どろろくじいさん」(せーとかみのところにある丸石、ごろいしも呼ぶ)の付近につみ上げる。これは「どんどんやき」をくむ時中に入れるのである。すすはきが終ると各家をまわってすすはきの竹を集めて来てこれもつみ上げる。これで十二月の行事は終る。正月四日になると中がしらがいもを使って各家を歩き「おかざり」をさげたのを車で集め、「せーとかみ」のところにつみ上げる。この時小がしらが各家へ入りこんで「つきのかずをいわってくれ」と云って金をもらう。一軒で二十銭か三十銭はくれたという。嫁をもらった家とか子供が生れた家からは特に多くいわってもらう。五十銭位くれた。子供が男児だった家では特にふんばつしてもらって一円くらいもらった。ところが銭をくれない家がある。すると「ごろいし」(せーとかみのところに置かれている丸石)を手拭にくるんで持ってゆき、家の中には